

30

全国諸藩での医学教育機関の拡がり ——美濃郡上藩を例に

森永 正文

(医)成医会 もりなが耳鼻咽喉科

郡上藩には、定府藩医を中心とする医術・医学稽古世話役による、少なくとも1795(寛政7)年以前までに遡ることのできる医学教育の歴史がある。1858(安政5)年、藩校に医学講座が設けられたのは、領内で疫病が流行し西洋医学治療の導入の必要性に迫られていたこと、1868(慶応4)年、医学が洋学とともに藩校の正科目とされたのは、従前の漢学・武芸に加え新時代に備えての人材養成の観点から藩校の総合学園化が望まれていたこと、また、1870(明治3)年、別館「医学所(のち医学校)」が設けられたのも、新政府による府藩県への種痘普及要請にもとづくものであった。郡上藩での医育機関の開設、拡充は、いわば必然の生んだ帰趨結果であったともいえる。小藩での医学教育機関はめずらしいものであったのか。このような疑問を解くべく、『各藩医学教育の展望』(山崎佐 国土社 1955)、『近世藩校の総合的研究』(笠井助治 吉川弘文館 1960)、『日本学校史の研究』(石川謙 小学館 1960)、『近世藩制藩校大事典』(大石学編 吉川弘文館 2006)の4書を2次資料として、藩医育機関の数、分布、設置年代、その藩高もふくめ文献的検討を試みた。

明治4年廃藩時の藩数は283藩、藩校数は272藩、医育機関設置藩数は、北海道・東北13藩(松前斗南(会津) 弘前一関 盛岡 仙台 秋田 亀田 矢島 米沢 泉 中村(相馬) 二本松)、関東10藩(笠間 土浦 水戸 足利 高崎 館林 佐倉 長尾(旧田中) 柴山(旧掛川) 小田原)、中部16藩(新発田 長岡 富山 金沢 大聖寺 大野 小浜 勝山 福井 府中 上田 松代 松本 大垣 郡上 名古屋)、近畿14藩(津 久居 彦根 田辺(舞鶴) 宮津 尼崎 篠山 竜野 林田 姫路 福本 岸和田 郡山 和歌山)、中国・四国16藩(鳥取 津和野 広瀬 松江 足守 岡山 広島 福山 岩国 徳山 山口(萩) 徳島 今治 宇和島 西条 高知)、九州21藩(久留米 豊津(小倉) 福岡 鹿島 唐津 佐賀 蓮池 厳原(対馬) 島原 平戸 熊本 臼杵 岡 佐伯 中津 日出 府内 飢肥 高鍋 延岡 鹿児島)の計90藩。設置率は31.8%と、3つの藩に1つという程度に設置されている。九州を中心とする西日本に多い。1756(宝暦6)年の熊本藩のものを最古とし、1870(明治3)年の飢肥藩などのものを最後とする。また、漢学1科のみが優勢な1829(文政12)年頃までのもの約25藩、医学・洋学などすべての科目が出そろった1854(嘉永7)年頃までのもの約20藩、以後1870年までのもの約40藩である。古い時代に全国に先がけての藩医育機関は熊本藩*、*鹿児島藩、新発田藩などの大中藩に多い。一方、明治初年に急増のものは約26藩であり、郡上藩など比較的小藩のものが多い。藩高では大藩(40万石以上)8藩、中藩(10万石以上)32藩、小藩(1万石以上)50藩であり、中小藩で約9割を占める。金沢藩の102.5万石が最大であり、林田藩などの1万石が最小である。3万石にも満たない藩が14藩もある。

小藩での医育機関は稀有なものではなかった。しかし、必ずしも多くみられるものではなく、その設立への動機の一つとして、郡上藩のような遠方の地域では、より自前の医育機関、医療機関が必要とされたのではないかと考えられる。また、明治4年当時、藩医育機関は地域、藩高にかかわらず全国に普遍的な拡がりを見せており、日本では、すでに本格的な医学教育を行うに際しての素地が出来上がっていたことも推察される。まさに百花繚乱とも言える藩医育機関の拡がりには、明治4年7月の廃藩置県により一気に霧散消失の運命をたどることとなる。新時代を見すえて開設された数多くの小藩の医学校は維新という時代のあだ花となってしまったのであろうか。次世代を養成しようという医育関係者の努力は決して無駄ではなかった。江戸期から廃藩置県に至るまでに開設の藩立医学校は、その後、明治5年設立の小倉医学校を始めとする全国の公立医学校への萌芽となったのである。